

2024年度 名古屋外国語大学外部評価員会議 議事録

1. 日 程 2025年1月28日(火) 14時00分～17時00分
2. 会 場 名駅キャンパス多目的ラボ (オンライン併用)
3. 出席者
(外部評価員：五十音順)
岩田 憲二 (日進市教育長)
帯野 久美子 (株式会社インターアクト・ジャパン代表取締役会長)
門多 丈 (株式会社カドタ・アンド・カンパニー代表取締役社長)
川畑 博昭 (愛知県立大学学長)
松田 千恵子 (東京都立大学大学院経営研究科教授) ※オンラインでのご参加
山口 千秋 (イビデン株式会社社外取締役)

(大学側)
亀山 郁夫 学長
高梨 芳郎 副学長 (研究・教育担当)
佐藤 都喜子 副学長 (学生支援担当)
梅垣 昌子 副学長 (教学マネジメント・将来構想担当)
恒川 孝司 副学長 (人事企画・総務担当)・法人事務局長
田地野 彰 外国語学部長
奥田 隆男 現代国際学部長
鈴木 茂 世界共生学部長
エリス俊子 世界教養学部長
早津 恵美子 国際コミュニケーション研究科長
竹下 裕隆 地域教育推進センター長

(陪席)
ハンフリー学長特別補佐、伊藤学長特別補佐、山本学長特別補佐
後藤事務局長、若尾国際交流部長、浅野学生部長・キャリアサポートセンター部
長、青木教務部長、児玉名駅キャンパス室長、榎庶務課長
4. 議題
 - (1) 三つのポリシー (学士課程) と学修成果の可視化について
 - (2) 2025年度カリキュラム編成について
 - (3) 高大連携の現在について
 - (4) 現在の本学をめぐる外的環境と将来の学部再編について
 - (5) 今年度の入試志願状況と今後の募集方法について

本学亀山学長より開会の挨拶 外部評価員による挨拶と本学出席者の紹介

議題1：三つのポリシー（学士課程）と学修成果の可視化について
高梨副学長より三つのポリシー（学士課程）と学修成果の可視化について説明。

外部評価員より、三つのポリシーと学修評価の可視化についてのご意見をいただく

山口評価員：

非常に体系だっていて、網羅されていると昨年から感じている。卒業時満足度アンケートで良い結果がでていることはいいことである。一方で客観的に、4年間で卒業時にどのくらい身についたかが気になっている。日本の若手社員と芸術・一般教養・歴史等の議論した経験があまりなく、関心がないと思われる。イギリス・アメリカ等の海外生活をした際に感じたことは、業務上の関係性であつても芸術・一般教養・歴史等の話をして関係性を深めていた。社会人として法律・税務・保険等の生活に必要な知識をどこまで理解して卒業しているのかも心配である。

門多評価員：

大学がどの方向にむかっているか、各学部・各学科の想いが文章になって大学案内に掲載されている。明確にグローバルな英語が浮き上がっている。グローバルな英語を様々な角度から取り組むということは現代にあつていると思う。ユニークさを宣伝する必要がある。アンケートの中でコロナ収束後ということもあり、留学と就職について過去3年間と比較して上がっていることは大きな方向性としてよいことである。

川畑評価員：

名古屋外国語大学の非常勤講師として在籍時に CP の部分で A 評価が3割以上と一斉通知がされた。機械的に割り切れるものではなく苦しい想いをした。一方で、このような基準を満たしていかなければならないと思う。大学を終えてから就職するにあたってどのような学びを引っ提げていくのかということで、大学に期待されて求められている学びと教室で提供できるものに苦しさが出てくる。アンケートで卒業生が何を学ばよかったかというのは、一つの指標である。他方で就職先企業がどのように感じているかの情報を掴めるとバランスの取れた組み方をとれるのではないか。卒業生がもっている力を輝かせるためにはそのような情報も必要なのではないか。

岩田評価員：

卒業時満足度アンケート項目に、大学側が力を入れていることや今後の課題を洗い出して分析し考察を入れてほしい。そうすることで3年の経過の中でアンケート結果や時代の流れを考慮し、大学が学生を育てるため、獲得するために何を重視しているかを把握することができる。『満足度が8割だからよかった。』ではなくて、『これに力を入れた割には学生には届いていなかった。』という今後の課題を把握していくことが大切なのではないか。首都圏に学生が流れる傾向が前提にあるのなら、中部圏の唯一の外国語大学ということをストロングポイントとしてこのような大学経営をした結果、このようなアンケート結果が出たというコメントがあるとよい。

帯野評価員：

卒業時満足度アンケートにおいて、思い通りの留学ができたという回答者が少なかったが、コロナ禍の影響で一時的なもので、回復していくと理解している。ジャパンスタディーズは非常に重要な教養・科目である。自国の宗教に基づく文化・伝統を学ぶこと、日本の価値観を持つということはグローバル人材の基本である。AI が発達していく中で割り切ることが出来ないヒューマンな部分で

日本の価値観・西洋文化・東洋文化を見つめていくことが非常に重要であり、素晴らしいことである。必須としてもよいのではないか。こんな科目があったらいいという科目の 1 位にお金の科目が挙がっていたが、それが大学の教養なのが大疑問であるが、日本の初等・中等教育ではお金の教育は行っていない。中学校を卒業した時点で社会人として生きていくことができる基本を学ぶことが義務教育の役割であるが、その義務教育でお金の教育がなされていないのは課題である。積み残しにはなるが、ニーズがあれば大学でも取り入れることも検討が必要かもしれない。

議題 2 : 2025 年度カリキュラム編成について

梅垣副学長より2025年度カリキュラム編成について説明。

外部評価員より、カリキュラム編成について意見をいただく

松田評価員:

非常に充実した教育がなされている。キャリア開発に重きを置いており、実際に学生も興味を持って学んでいることを私も確認している。先ほどの STEAM 教育の話は重要と考える。金融の教育は大学ですべきことなのかという指摘もあったが、キャリアデザインという科目で救えるのではないか。外国語を学んでいる学生は今後のキャリアの中でグローバル資本市場、金融市場に触れる機会も多く、キャリアを深めていく上で数字の話は非常に大切である。システム基礎という科目もあり、ある程度は行われていると見受けられるが、Excel の使い方からデータプログラミングまで現在必要とされるスキルは多岐にわたる。AI 化が進むことも含めて考えると学生が社会に出るまでにこうしたスキルを身に付けておくことは必要不可欠である。会議資料に卒業生対象の就業状況アンケートがあり、社会で求められている能力としてコミュニケーション能力が多く挙げられていたが、この結果はバイアスがかかっている可能性がある。すなわち、外国語を専攻している学生は、元々コミュニケーションが求められる職場に就職することが多いということではないか。その場合、逆に言えばそのような環境にいるため、今後求められるような AI 対応能力を身に付けることができず、そうした職業から外されるというリスクもある。そうならないよう、新しい時代に求められる能力をキャリアデザインという科目で充実していただけたらいいと感じた。私の所属している大学でもデータプログラミングは、これからは必須のスキルではないかという議論を行い、カリキュラムの改編も行った。何を専門として学ぶのかに限らず、身に付けておくことが必要な分野である。

議題 3 : 高大連携の現在について

竹下地域教育センター長より、高大連携の現在について説明。

外部評価員より、高大連携について意見をいただく

川畑評価員:

北海道白老町との締結について、所属されている先生の研究のご縁を手繰り寄せて、今後の交流を固いものにした素敵なお話であると感じた。アイヌ民族等で有名な白老町と協定を結ばれた上で、今後の方向性や希望や想いを教えていただきたい。二点目は教育体制の中で英語を武器にいくことを大切にされているが、愛知県でも国際バカロレア等、名古屋外国語大学の強みとしてその部分で連携は考えておられるのか。

鈴木世界共生学部長:

地域創成科目でフィールドワークと毎年白老で研修している。白老東高校の地域科目という地域おこしの科目があり、連携を取りながら共同研究し地道に活動を継続していきたい。

竹下地域教育推進センター長：

バカロレアについて愛知県内の公立高校の3校長が来学し、伊藤フランス語学科長・学長特別補佐にお話しがあり、バカロレアがどういうものか見学された。国際系の大学2校と連携協定を結び教員を2年間派遣するという事業を考えているとのこと。教育委員会からはバカロレアを取り組む高校の教員に対する英語教育について何か出来ないかということの内々でご相談が来ている。

帯野評価員：

効果的に高大連携ができていいる大学は少ない。可能であれば学生確保や入試にも繋げていけな
いか。高校生や留学生と大学生という多様な属性をもった学生と一緒にいると、どのような効果が
でるか。本当の意味での英語教育は今の学生の能力にマッチしていない。大阪公立大学でも入
試を見据えた高大接続ができないかと考えている。英語の学力が低い生徒を大学がリードしてい
くべき。探求学習(問いをたてる力)も乏しい。大学の中で高校生に多様な学習者と一緒に学ばせ
て、その中で偏差値だけでなく新しい能力を引っ張っていけるような入学試験を開発できていけ
たらよい。このような取り組みは学生確保に繋がると考える。

議題4: 現在の本学をめぐる外的環境と将来の学部再編について

議題5: 今年度の入試志願状況と今後の募集方法について

恒川副学長より、現在の本学をめぐる外的環境と将来の学部再編、今年度の入試志願状況と今
後の募集方法について説明。

外部評価員より、学部再編・今後の募集方法について意見をいただく

門多評価員：

英語自体がグローバルな言語になっている。AI 等は文系だということを引き張り込んでアルゴリズムの
アクセントを名古屋外国語大学の売り(強化項目)にする切り口はどうか。

恒川副学長：

まず情報・IT 関係についてグローバルビジネス学科が中心となり大学全体で取り組む文科省が勧める
MDASH という情報教育を取り入れている。同時に関西学院大学等が行っている情報教育のプログラ
ムがあり、企業に入社してから有用な能力でありつつあり、中心の学科はあったとしても大学全体で取
り入れていく予定である。

全体のご質問のグローバルに関しては、名古屋外国語大学で最も大きな強みは英語であり、どのよ
うなことが起きて英語は志願者に需要がある。『その中でグローバルの捉え方をどうするのか』とい
うものが永遠の課題である。大きくグローバルな視野から英語というものを捉えてもっていかな
ければならない。したがって総合英語学科では英語そのもののオーソドックスな教育・コミ
ュニケーションを主体とした英語・教育の三つを中心としている。総合英語学部・地域社会学
部の2学部については英語をしっかり活用できるように学習していく。フランス・ヨーロッパ
学科については英語・フランス語を専攻するコースをそれぞれ準備して、英語を強化しつつも
英語のみに偏らないように学生のニーズに合わせた環境を整えていくことが今後の課題であ
る。

山口評価員：

人口が右肩下がり減少している中でどのように生き残っていくか。大学は何のためにあり、

学生のためにどれだけ支援できるか。学生ファーストをどれだけ徹底できるかということが重要である。グローバルということで日本人の人口は減るが、海外から来ていただき補っていくしかない。日本語・日本文化を海外の方に教育することは将来性がある。日本で教えることも大切だが、日本文化のレスpektが高まっている中で、思い切って東南アジア等に学校を作ることも選択肢として検討していただき、グローバル化に磨きがかかって海外から高く評価される大学になる大きなチャンスではないか。

亀山学長：

東南アジアやインドネシアへの関心が高まっている。複言語科目の履修者も多い。高校生の段階でインドネシアへ関心をもつ方が少ないので、受験者の増加に結び付かないが、大学を卒業した頃にインドネシアがリアルな言語であると認識できる。それを前倒しで取り組めるとよいのではないかという発想もあり、中国語学科を中国・アジア学科、フランス語学科をフランス・ヨーロッパ学科と改編した。フランス・ヨーロッパ学科の専攻言語は英語で中国・アジア学科の専攻言語は韓国語である。将来的に状況が劇的に変わる中でインドネシア語等が必要に合ったものが組み込めるように枠組みを整えていきたい。

岩田評価員：

愛知県周辺の保護者・子どもたちは、地元が好きで県内の総合大学・付属高校にエスカレーター方式で進学することを望む声が多い。日進・長久手周辺の小中学生を大切にさせていただけても、良い影響をもたらすのではないか。愛知県の方でも（知名度が）上位の大学は教育委員会や学校へ挨拶に訪れている。学びの部分でも施設の部分でも、知ってもらうことが大切である。中学校3年生は数年後には受験生・大学生となる。実例としては、コロナ禍の中学生は部活動の大会が全て中止になっていた。小さな地区の大会だけでも中学3年生にとって最後の大会を開催してあげたい気持ちで愛知県の全ての大学にお願いに伺ったところ、愛知学院大学が会場・施設を提供していただけることとなり、各種目の最後の大会を行うことができ、子どもたちは非常に喜んでいて。困った状況を大学自ら手を差し伸べてくれたことで大学に対して良い印象をもったという意見を数年後の成人式の場で聞いた。名古屋外国語大学や名古屋学芸大学もご協力いただけると有難い。偏差値という話題が出たが、ICT教育という面では小中学校でタブレットを使って意見交換や探求に関わる授業は既に行っているため、高校や大学で同じことをすることは必要なのか。小中学校と同じような授業を受けていると明らかに偏差値が下がる。しかしながら今の学生は丁寧に寄り添ってくれる先生を求めている。私自身は大学生でそこまで必要かという考えだが、折り合いを付けながら、基礎学力の面も含めてレベルアップしていくしかない。小中学校ではタブレットを使ってかなりの授業を行っている。小中学校でどのような授業をしているのか、それを高校でどのように受けて繋げて、大学でどのような授業をするのか、一度近くの小中学校の授業をご覧くださいといいのではないか。

帯野評価員：

受験生の人口は減っていることは間違いないことに加えて、受験生は強気になってきて、国公立を志願している。また多数の大学が入試の多様性を展開していく中で、弱小私学は大変な環境である。社会に受け入れられる名前を付けていても、留学生が多くても、今何をしたいかわからないというのは、上手いかわからないのではないか。これだという武器を持っている大学は強く、名古屋外国語大学は英語という売り文句がある。自信を持ってそれを打ち出していくことが大切であると思う。反対に地球社会学部がわかりづらいと感じた。英語を打ち出したほうがいいのではないか。留学生の287名とは学部生であるか。単位履修であるか。

若尾国際交流部長：

交換留学で半年もしくは一年の短期留学生。

帯野評価員：

時間はかかるかもしれないが、名古屋外国語大学ならではの戦略を考えた方がいいのではないかと。というのはAPUにどうやってこのような多様な国々から優秀な留学生が集まるのかを尋ねたら、約30年前に職員全員で大使館と友好協会をお願いに訪問したと伺った。企業も大学もドブ板営業であると感じた。また母校の追手門学院大学の国際教養学部は海外の優秀な特別な学生を受け入れ、日本企業ではなく海外企業に就職させている。留学生戦略も検討していただくといいのではないかと期待している。

川畑評価員：

地球社会学部は個人的には魅力的であると感じる。他方で大学が工夫してひねればひねるほど、高校生にとってわかりづらくなるジレンマがある。小中高の教育も共に変化していくことを考慮することも重要だが、地球社会学部が何を学ぶところなのかはつきりとうち出せるといいと思う。英語キャリア学科という学科名でITデータサイエンス系を専攻とするのであれば、外国語系を目指す受験生にとって外国語に加えて更なる魅力を出すとの観点から、看板に表れた方がいいのではないかと。外大でデータサイエンスも学べるのがわかる方がいい。総合英語学部という英語三昧の専門的な学部が設置されるのであれば、英語キャリア学科は、どう違うのかわかりづらいのではないか。文理融合とまでは言わないが領域横断的な教育なり思考をもっており語学に長けている、それを強みにしたい子にとっては惹きつける力になるのではないかと。中部地区で唯一、外国語研究(FOREIGN STUDIES)を担っていくことが名古屋外国語大学のレゾンデイトル(存在意義)だと思ふ。世界に飛び立つ教育を施すことは重要だが、一方で地に足をつけてみると、この地域は既に異文化・多言語・多文化というところで優秀な学生・ヒューマンな学生を送っていくという見地にたって全体を見直してもいいのではないかと思ふ。余計なことかもしれないが、フランス・ヨーロッパ学科、中国・アジア学科のところの説明は、把握している限りで言えば、いきなり解体して新しいものが作れるわけではないことは理解でき、既存のものを踏まえたときにギリギリの選択で出てきたのかなと思ふが、なぜヨーロッパ・アジアではないのか、違和感がある。いきなりスクラップ&ビルドはできない、既存のものを大切にしつつグラデーショナルに移行していくことは一種の苦肉の策なのかなと思ふ。他方で冬期特別講座のような、こういう多様な言語に触手が伸ばせるのは、名古屋外国語大学だけ。言語の多様性(単なる語学学習が好きではなく、どんどん外国籍の人が日本にやってくる現状が来るときの多様性)FOREIGN STUDIESの中の言語の多様性が期待できるのは名古屋外国語大学だけではないか。英語が強みであることは良く理解できて、否定も全くしないが、多様な言語というのは力を入れていいところダイヤモンドではないか。他の大学(国公立)には真似できないところだと思ふ。

亀山学長より閉会の挨拶